

失ったからこそその成長

岩手県北上市立北上中学校

三年 伊藤 心 春

十メートル先のバーに向かって、助走のコースを駆ける。全てのタイミングを一瞬で合わせて、右足で踏み切る。私の体は空に浮き上がり、跳躍を終えた私の体をマットが包み込んでくれる、はずだった。マットの上にいるはずの私は、なぜか、地面に座り込んでいた。

地区予選大会の四種競技。東北大会にもつながる大会。前年度の県新人戦で優勝した私は、今年度も「優勝を果たし、東北大会で絶対入賞する」という目標に向かって練習に励んできた。部員が帰っても残って一人で練習し、暇さえあれば走りに行くほど陸上が好きだった。大会当日の調子もよく、一位が確定し、県大会にも進める。次の跳躍で自分の限界を超えてやる。そんな思いで挑んだ最後の三本目の跳躍。九歩目を右足で踏み切った直後、力が入らなくなっていた。立ち上がろうとしても足が震えて立てない。「きつと軽いケガだろう。試合中にケガをするなんてみっともない」と思っていたが、痛みはどんどん増していき、私の不安も大きくなっていった。

車椅子にさせられ、病院に連れていかれた私に、医師はこう告げた。

「腓骨骨折です。四カ月は走れません。」
嘘だ。四カ月走れないということは、せっかく出場権を獲得した県大会にも出られない、その次の東北大会にも、最後の地区陸上大会にも。私の競技生活が終わってしまう？ 最初は信じられず、いや、事実を認めたくなく、家に帰って筋トレをしようとし、足を踏み出そうとした。しかし、私の右足は動かさず、立ち上がることもできなかった。「あきらめなきゃいけない」涙が出てきた。

競技ができなくなった私は、部活動中も大会中も常に応援。表面上は応援しているつもりでも、心の中は羨ましさで悔しさを占められ、全く応援できなかった。仲間が好成績を出したときは、喜んであげなければいけないのに、素直に喜べない。また、「今日の部活だるい」とか、「車椅子、楽でしょう」という友達の一言にも苛立ちを感じ、「じゃあ変わってよ」と思ってしまった。仲間を心から応援できず、誰の言葉も素直に聞けない自分。そんな自分に、嫌気がさしてきた。そして、「最後の大会で東北大会に行けなかった自分」が許せなかった。この大会に全てをかけ、周りからも期待されていたが、その期待をあの一瞬で全て裏切ったのだと思うと、周りに申し訳なく思え、私は自分を責め続けた。

いつまでも大会に出られなかったことを引きずっていた私に力をくれたのは、母の一言だった。
「いつまでも落ち込んでいたら何も変わらないよ。頑張れない気持ちもわかるけど、これを乗り越えれば、心春はもつと強くなれる。成長できるチャンスだよ。心春はこのケガで中学最後の陸上生活を失ったけれど、もつと大切なことに気づけたと思うよ。よく考えてみて。悪いことばっかりじゃないんだよ」
母の言葉は私の心にすっと染み込んでいき、私の心の氷はだんだん解けていった。

私はこのケガで「失ったもの」ばかり教えていたが、「得たもの」に目を向けてみた。私の周りには、心配してくれる家族がいる。同じ部員でさえも応援できない私を受け入れ、そつと励ましてくれる陸上部の仲間。寄り添い、励ましてくれる先生。車椅子を押してくれる学級の友達。私の周りには、こんなにも多くの人がいて、私を支えてくれていたのだと気づいた。

私は競技生活を失ってしまったが、その代わり、「成長できるチャンス」を手に入れることができた。私の成長、それは、日常のありがたさ、周りの人達の支えに気づき、感謝の気持ちを持てたことである。人は辛いことがあると悲しみや喪失感でいっぱいになってしまいがちだが、そのこと自分を強くするきっかけにし、「ピンチ」を成長できる「チャンス」に変えることができる人になりたい。これは簡単なことではなく、むしろすごく難しいことだ。失ったものが大きければ大きいほど、得たものに向けることは辛いことだと思う。しかし失ったものが大きいほど、周りから得るものも大きく、さらに成長できるチャンスへとつながるに違いない。私はこれからもたくさんさんの困難にぶつかるだろう。しかし、今回のケガ、そして母の言葉があったからこそ、どんな困難も「成長できるチャンス」に変え、乗り越えていける自信がある。

私の足は今、バーを跳ぶことはできない。でも、私の前には乗り越えるべき目標という名のバーがある。私は越える。周りへの感謝とあきらめない強さを力にして。